新批評・近代日本文学の構造

4

近代芸能文学

村松定孝・竹内清己編

国書刊行会

新批評・近代日本文学の構造 4 近代芸能文学

昭和55年8月10日　第一刷発行
平成4年1月20日　第二刷発行

著作権者との
申合せにより
検印省略

編者　村松定孝
　　竹内清己
発行者　割田剛雄

〒170　東京都豊島区巣鴨3－5－18
発行所　株式会社国書刊行会
電話 (3917)8287(代表)振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。　印刷・セイユウ写真印刷㈱　製本・青木製本
ISBN4-336-02041-8

緒言

村松定孝

『新批評・近代日本文学の構造』第四巻の刊行に当って、まず本巻の内容を紹介したうえで、その編集上の趣旨と目的について言及することとしたい。

この研究叢書は、近代文学の成立と発展に関して、その機軸となった主題のうち、従来比較的度外視されてきたものに論点を据え、近代文学研究上見逃す事の出来ない諸問題を抽出するところに主眼が置かれている。

この意図に拠って、既に第一巻の「近代文学の作者」、第二巻の「近代文学の読者」、第三巻の「近代文学の風土」の上梓をみてきたわけであるが、本巻は、これらに続いて、「近代芸能文学」という題目のもとに編集をこころみたものである。

この題目の展開は、「近代文学における芸能の意義」「伝統と芸能」「近代芸能作家論」という三部門の構成がとられることによって、充実した様相を整え得たかと思う。

即ち、「近代文学における芸能の意義」の部門では、芸能なるものが近代文学史において如何なる位置を占めているかを考察し、次に近代文学における芸術論と芸能論との比較省察を、さらに近代文学における芸能的要素の解明をこころみている。その作業は、単に概念的総論に終らず、各項目の内容は具体的分析に迫り、精緻な成果を挙げているといってよいであろう。

次に「伝統と芸能」の部門では、「近代師匠論」、「伝統と創造の理論」、「職人気質とアルチザン」、「近代文学とフォークロア」の四項目を立てて、それぞれの観点から近代文学の持つ芸能性の問題を追求し、近代文学と芸能とのか

かわりの深さを論じている。

近代文学の研究において、このようなテーマで真正面からいどんだ類例は、これまでには稀であったと自認するものである。

最後の「近代芸能作家論」の部門は、十二名の作家について、既に定評のあるこの分野の研究家と画期的業績を示した新進の論文を以て、さながら豪華なる曼陀羅をみるような盛況を呈している。

以上述べたところは内容紹介の如きものであるが、本巻編集上の趣旨と目的とは何か。それは、これまで、とかく軽視されがちであった芸能と文学との緊密なる関係の考察を挽回することによって、近代文学をその光芒の中で捕らえようとするものであり、この趣旨に基づいて編集されたのが本巻である。そして、読者に新たなる近代文学研究上の方途を見出させることを期待するところに、その目的が存する。

古代の吟遊詩人たちが琴を奏でながら自作の詩を朗唱した頃には、芸能と文学とは未分化であったし、平曲の琵琶法師の技能の伝誦は、文字による創作と異るとはいえ、師弟の在り方は、おのずから文学修業の道へつながっていた。

かつて広津和郎は「散文芸術の位置」で、――散文芸術は直ぐ人生の左隣りに在るもので、右隣りには詩・美術・音楽というような芸術が並んでいる――と主張して話題を呼んだ。広津の主張は、――散文芸術は、それだからといって芸術として不純なのではなく、人生の直ぐ隣り合せだというところに散文芸術の一番純粋の特色がある――と叫んで小説家の芸術家としての存在意義を強調したのであった。この解釈は、それなりの意義はあるが、詩・音楽・美術の綜合された形で演劇は存在し、演劇は小説と隣するとの見解も成立しうる。いま、演劇の祖をたずねれば、叙事詩を歌った古代芸能人に帰着する。叙事詩は演技者の芸能力によって活かされ、それが、やがて民衆を歓ばしめた物語作者の発生を約束したのであった。近代の小説家の技術の根底には、或いはこうした古代のわざおぎの血が脈々とつたわっているのではあるまいか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なお、「作家論」の個々のとりあげ方は、自作自演の作者、舞台芸能の脚本家、脚本用の戯曲の原作者、小説の中で芸能を題材としてあつかっている人たちなどについての考察がなされていて、千差万別であるが、ひとしくするところは近代作家と芸能との関連の重要さを説いた点にある。

つまり、芸能を素通りして、近代作家の創造も、その技術も、受容者の鑑賞の問題も語りえないことを如実に示しているところに眼をそそいで欲しいのである。

そして、作家もまた芸能者である事実を明らかにする認識こそ望ましいものと考える。

右の本巻編集の意衷を諒承して、本文に親しんでいただければ幸いである。

Ⅳ　近代芸能文学　目次

緒言……村松定孝 1

第一章　近代文学における芸能の意義

近代文学における芸能の位置……村松定孝 11
近代文学における芸術論と芸能論……竹内清己 33
近代文学における芸能的要素の意味……松田　修 53

第二章　伝統と芸能

近代師匠論……森安理文 73
伝統と創造の理論……石附陽子 89
職人気質とアルチザン……大久保典夫 101
近代文学とフォークロア……阿部正路 113

第三章　近代芸能作家論

三遊亭円朝……興津　要　133
岡本綺堂……福田宏子　145
尾崎紅葉……岡　保生　155
泉　鏡花……笠原伸夫　167
永井荷風……木村洋子　177
谷崎潤一郎……橋本芳一郎　189
折口信夫……石内　徹　199
岡本かの子……佐藤郁子　211
川端康成……長谷川泉　221
三島由紀夫……越次倶子　233
木下順二……高橋恵子　243
水上　勉……大河内昭爾　253
あとがき　竹内清己　265

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　近代文学における芸能の意義

近代文学における芸能の位置

村松定孝

芸能とは何かの事

この題目によって論ずるに先立ち、まず「芸能」の語義について明確にしておきたく思う。

「芸能」とは何か。手元の新村出編「広辞苑」（岩波書店刊）によって、これを検するに、①体得し、体現できる芸。身についた芸の能力。②映画・演劇・音楽・歌謡・舞踊などの大衆的な演芸。③芸術と技能と。詩歌・音楽・絵画・工芸・書道・生花・茶道などの汎称。④芸事。といった語釈がほどこされている。このうちで①③④は、本論の目的である近代文学と芸能との関係を眺めるには無関係なものと考えたい。何故ならば、それは言葉そのものの言い換えに過ぎないか、乃至は芸術一般を指しているようであるからである。②が「大衆的な演芸」としているのに対して、③は演劇をぬかして、文芸や時間・空間芸術に習い事を加えている。

これではここでいう「芸能」のイマージュは迫ってこない。以下、②の語義に基づいて「芸能」の本質を見きわめてゆきたい。「芸能」が大衆演芸であるのならば、それは高踏的、前衛的、貴族的、非民衆的なものではないことだけは、たしかなように感じとられる。

然らば、「芸能」と「芸術」とでは、どこで重なり、どこで、まったく別個であるか。

この疑問を解決するのに、最も手軽で、わかり易い名称がある。それは「芸術家」に対して、「芸能人」という言葉のあることである。これは、今日では、いや今日に於いて、つくられたものであるが、テレビジョンのタレントなどに適用される場合が多く、プロの演技者として、公衆に名演技を以て親しまれ、娯楽的方面で、よく知られている存在を指しているとみてよいであろう。従って、芸能人は、民俗的演技者ではあってもどうも芸術家と呼ばれるには、ふさわしくないと考えたい。

そこで芸能人を排除した芸術家とは何かを解明する必要が生ずる。その方途として、再び「広辞苑」で、まず「芸術」の項に当ると、「特種の材料・技巧・様式などによる美の創作・表現」となっている。

では芸術作品には、どのようなものが含まれるかを、ついでに覗いてみると、「造形芸術（彫刻・絵画・建築）、表情芸術（舞踊・演劇）、音響芸術（音楽）、言語芸術（詩・小説・戯曲）に分けることもある」となっている。

そうであるならば、芸術家とは右のそれぞれの芸術ジャンルの創作者であり、また表現者の総称ということにもなるであろう。ちなみに、「芸術家」の項では、「芸術の創作活動を行う人」としている。

ところで「芸能人」のほうを、どう解説しているかと期待したところ、その項目は見当らず、ただ「芸人」の項が見つかった。これは「芸に巧みな人」「多芸な人」「遊芸を職業とする人」となっている。

ここでひとつのこだわりが生ずる。俳優は芸能者であり、芸人の一種であるとしても、だが、ふつう新劇の俳優は芸人とはいわない習慣があることである。歌舞伎や新派劇、家庭劇、剣劇、笑劇といった大衆に親しまれてきた演劇人及び落語家、講釈師、万歳師などが芸人であり、役者である。役者のことを芝居者ともいうのは、役者が演ずるものが芝居であるからだ。それが新劇の場合は、プログラムにスタッフ（劇団員、演技部員）とはなっているが、芸人呼ばわりは禁物であるようである。そうすると、彼等は芸術（戯曲）を表現するところの芸術家ということになるのであろうか。それが、新劇畑の人でも偶々テレビ番組のドラマに出演し、一般大衆向けに、歌舞伎や新派の役者と肩

をならべて競演することになると、これは芸能人なのである。

ところでNHKでは、毎年大晦日に、紅白歌合戦なるものを放映する。その際に、選手宣誓なるものがあって、男女選手（歌手）代表が片手をあげて「われわれはアーティスト精神にのっとり、正々堂々戦うことを誓います」と叫ぶ。あれを聴くたびに、論者は歌謡曲の歌い手も芸術家（アーティスト）なのだろうかと疑問に思いつづけてきた。もとより、自分で作詞作曲もこころみるところの創作家的歌手の場合もあり、芸術家と芸能人をかねることもあるであろう。しかし、民謡の歌い手や浪曲子守歌などの歌手を芸術家呼ばわりするのは、おそらく本人も不本意であろうし、「あなたは芸術家ですか」と訊ねるのは、皮肉に聞えるに違いない。紅白歌合戦の歌手たちは、芸能人には違いないが、アーティストとみずからを規定するのは、誰が定めた宣誓文かは知らぬが大げさすぎてややおこがましいのではあるまいか。

と、さまざまにおもいなやんだ結果、岩崎民平編の最新版の「和英辞典」（研究社刊）に当ってみることにした。つまり芸能人を英語化した際には、どういうことになるかを引いてみたかったわけである。すると、なんと“Artistes and public performer”という、まことに、巧妙なる記述を見出しえた。

岩崎氏は「芸能人」を律するに当って、芸術家だけと規定することに、ある種のためらいを意識したのだろう。そこで「芸術家にして、公衆向けの達人・名人」という意味の英語を動員せざるをえなかったのである。これでやや、論者の疑念も晴れかけた。

つまり芸能人とは、一部のインテリを対象にするが如き気取った高級な芸術家にあらざる、芸に長（た）けた人と考えたらよいことになりそうである。いわば大衆的アーティストとでもいうべきものかもしれない。しかしアーティスト精神はどう考えても不釣合なのである。もっと端的にいえば、芸能人とはまさしく芸人に他ならないのである。もし、芸能人といわれる人にして、「あなたは芸人ですか」と聞かれて抵抗を感じるむきがあるとしたら、「あなたの技能は、名人芸に値する」といわれても不満であることになる。彼等とて名人芸といわれて、よもや悪い気はしないであろう。名人芸は、芸人の**極致**である。しからば、芸能人は芸人たることの誇りを自覚すべしということになる。

またしても、ついでのことに右「和英辞典」の「芸能」の項を引いてみると、これは、また、「広辞苑」以上に的確に、その実体を示す英語が示されている。即ち、"Accomplishments; entertainment; shows"となっているのである。「仕上げられた芸にして、娯楽にして、見せ物」というぐらいの意味であろうか。つまり、芸能とは、公衆を名演技を以て、よろこばせ、物珍しいものとして、あくまでも、大衆を愉しませるものとみなすべきであろう。そして、これに伝統とか、古典という語が冠せられると、能とか歌舞伎を指すことになり、民俗芸能といえば、祭りの踊の演技・郷土民謡をいうことになる。

以上、和英辞典の英語訳を重視しすぎるかに受けとられそうな次第を縷々申してきたが、要するに最近の辞書の編者ともなれば、日本人の言語生活を掬みあげてさまざまな資料に基づき、一語ずつそれに最もふさわしい生きた英語を適合させることになろうから、その英訳は国民に共通した見方に最大限の同調をこころみているとみて、あやまたないであろう。従って和英辞典の解釈は、ときには広辞苑以上に国民の判断に適合しているかもしれない。

ところでそういう性格の上に成立している芸能が、近代文学とどういう関係に置かれてきたかの解明を演劇を主として以下論旨を進めてみることにしたい。

演劇改良と近代作家との間

わが国の演劇の歴史は、遠く奈良平安朝時代の伎楽・田楽・申楽に発し、傀儡(くぐつ)師や曲芸のたぐいが進化して、鎌倉室町時代を経て、猿楽能が能楽に昇華する。一方、慶長の頃に、出雲大社の巫女阿国(おくに)が京都へ出て念仏踊を演じたのにもの真似芸が加わって阿国歌舞伎が生じ、これが若衆歌舞伎、野郎歌舞伎へと変貌しつつ、人形浄瑠璃劇の発達と呼応して、現存の歌舞伎芝居の形態を近世中期には、ほぼ完成する。

もう、その頃になると大阪、江戸などの大都市には桟敷を備けた大劇場がつくられていたのであるが、はじめは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com